

平成 29 年 8 月 26 日
大正大学大講堂

真宗と石仏

—聖徳太子南無仏と法蔵菩薩の造像の意図について—

尾田武雄

1、富山県の石仏調査

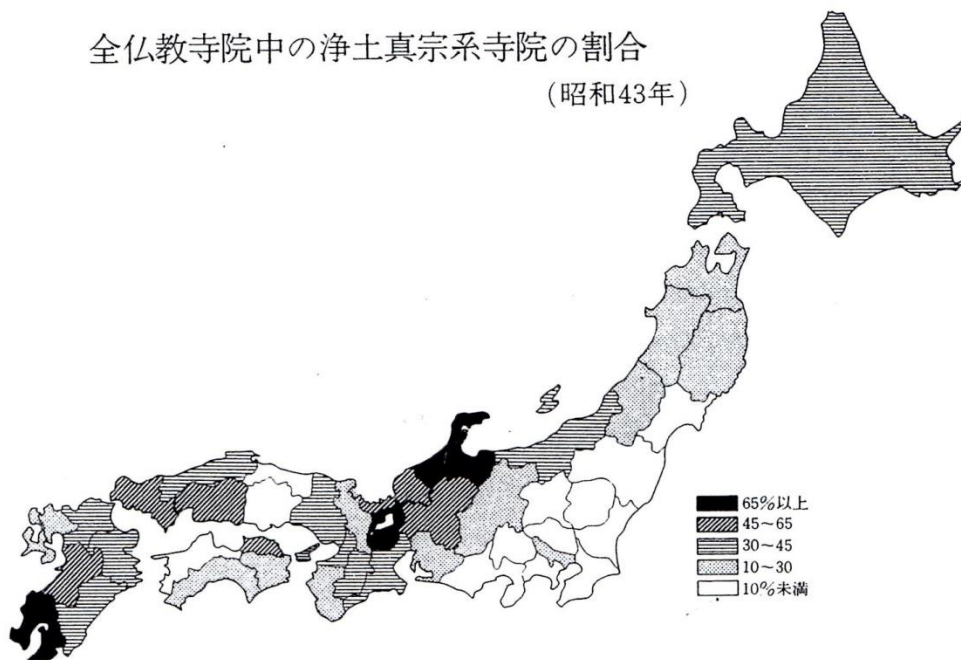
昭和 40 年後半から京田良志先生らの協力で悉皆調査が進む。

北陸の富山は東西文化の接点である。平成 13 年日本石仏協会創立 25 周年で「東西文化の接点・北陸の石仏」について発表。

古くから関西の影響を受けていましたが、江戸時代末には、神通川流域に道祖神などの造立が目立つ。

富山県は真宗王国

図 1 真宗寺院の割合（『県史』現代統計編）



資料：全日本仏教会寺院名鑑刊行会『全国寺院名鑑』昭和44年3月刊により作成。

表1 仏教宗派における真宗の割合
(『県史』現代統計編)

高い順	低い順
①富山70.8	千葉1.1
②石川70.1	埼玉1.2
③鹿児島69.2	群馬2.4
④滋賀66.5	静岡3.2
⑤熊本53.9	山梨4.9
⑥広島51.3	宮城5.6
⑦福井47.8	福島5.2
⑧香川45.9	岡山7.0
⑨岐阜45.6	茨城8.6
⑩北海道44.3	神奈川9.1
⑪福岡44.2	鳥取9.1
⑫大阪44.0	岩手10.6
⑬大分43.0	山形11.9
⑭新潟39.4	長野13.3
⑮島根37.4	徳島13.4
⑯三重35.4	青森14.0
⑰宮崎34.2	京都14.6
⑱奈良33.8	

富山県西部は真宗大谷派（お東） 蓮如上人の開基伝承
 東部は浄土真宗本願寺派（お西） 親鸞聖人の開基伝承

真宗の教え

「念仏を称えたら、死んだら極楽へ往ける」と教えられたのが親鸞聖人と思っ
 ておられる方が少なくありませんが、親鸞聖人の教えは『平生業成』といわれ、
 平生、生きている時が大事なんだと訴えられた方が親鸞聖人です。

真宗では「おおよそ造像・起塔は、弥陀の本願にあらざる所行なり」（覚如著『改
 邪鈔』）、また「他流には『名号より絵像、えぞうより木造』というなり、当流に
 は『木造より絵像、えぞうより名号』というなり」（「蓮如上人御一代記聞書」）

聖徳太子南無仏

杉谷山瑞泉寺は、明徳元年（1390）に本願寺第五代綽如によって建立され、寺域は約1万坪ある。綽如は井波の山中杉谷の地に庵を結び、布教活動していた。中国からの国書が朝廷に届いたが、難解な手紙は誰も読めず、博学の綽如がその国書を解読したのである。時の後小松天皇が大変喜ばれ、その褒美として木造聖徳太子二歳の南無仏を賜った。

いわゆる南無仏太子像は、「日本の釈迦」とたとえられた聖徳太子の二歳のお姿である。この像は『しょうとくでんりやく聖徳太子伝暦』に、太子二歳の2月15日の朝「始めて手を合わせ、東に向いて南無仏と称え」とあるのに基づいて造られたものである。上半身が裸で、腰に緋の袴をつけ、正面に向かって合掌する童形像である。

明治12年9月1日、瑞泉寺香部屋より出火して本堂、太子堂が全焼したことより、東本願寺から多額の借金を抱えてしまった。このため南無仏太子像や絵伝などの法物を巡回し、地方に太子像の開扉と絵伝の絵解きをおこなうようになった。巡回は農閑期を利用して、多いときは80カ所におよび、南砺市、砺波市遠くは富山市、射水市、小矢部市、石川県能登、石川郡、金沢近郷、福井県今庄あたりまで、信者の招請によって巡回が行われた。

昭和52年3月20日、砺波市荒高屋の河島家では青年たちの行なう太子像をお迎えして、若衆報恩講が行われた。昨日庄川町天正から受け継いだ太子像の入った長持を受け、河嶋家の座敷に安置される。おぎ御座太鼓の合図で始まり、二幅の御絵伝の前では、瑞泉寺布教師が名調子で仏教伝来の話がなされ、座敷は満員である。この若衆報恩講を支える荒高屋青年扶共団は、昔は15歳から30歳までの長男しか入れなかったそうである。2日間で3回の御座が行われ、いろんな世話がこの若衆によって行われる。これはそれなりに老若男女とも楽しい祭りのような雰囲気である。ここでの御座が終わると、今度は小杉町太閤山へ引き継がれた。このように明治期から昭和40年ごろまでは華やかにまた生き生きと行われてきたのである。また太子像と法物を受けることは、大変な名誉なことと認識され、またその家のステータスにもなった。

この巡回にやや遅れて、巡回先周辺で聖徳太子南無二歳石仏の造立が盛んになるのである。またその石仏は神社のご神体を招くように丁重に迎えられ、そして熱狂的に歓迎されたのである。大正期に入ると集落での造立も多いが、個人の造立も増えてきて、戦死者や水死者に対する供養のためのものが多くなる。昭和期に入ると、ほとんど個人的な造立が多くなり、地藏と造立と似た子供の死への供養的意味合いが強くなる。しかしムラでの造立も衰えてはいない。

太子南無石仏の造立の、年次在銘の最も新しいのが昭和36年の平村見座にあ

るものであり、これは個人の追悼の造立である。砺波地方では、石仏の造像は昭和 20 年の終戦以来多くはない。これは太子南無石仏の造立にも言えることである。

その像容と特徴 合掌する二歳像

丸彫りで高さ約 30 センチから 40 センチ

造立の時期とその分布

明治 20 年代から昭和初期

井波瑞泉寺から半径 20 キロ

瑞泉寺から北西の散村の展開するところに多い

造立した人々 明治期は地域のシンボリック 戦没者・若連中の記念神社・公民館

大正期は、個人的な造立が多くなる

昭和前期は、ほとんど個人的な造立

石材と石工 金屋石と森川栄次郎

祭りとお堂 真宗大谷派僧侶。飛び抜けて豪華なお堂。

五劫思惟の法蔵菩薩

富山県は真宗王国であり、朝夕仏壇にお参りする真摯な門徒が多い。その際に読まれるのが「阿弥陀経」と共に「正信偈」である。「正信偈」の冒頭に「帰命無量寿如来 南無不可思議光 法蔵菩薩因位時」とあり民衆には親しまれている菩薩名である。

法蔵菩薩は「ある国王が国と王位を捨てて沙門となり、法蔵比丘（菩薩）と号して、世自在王仏のもとで諸仏の浄土の因を覩見し、五劫のあいだ、思惟して四十八願を選び取り、兆載永劫にわたる修行の結果、十劫の古えに無量仏となり、現に西方の安楽世界に在しますと説く」（『真宗新辞典』）と説かれてあり、阿弥陀如来の修行されている姿が法蔵菩薩とされている。即ち『無量寿経』に説く「阿弥陀如来が因位（法蔵比丘）のとき、浄土の建立と一切衆生の救済を願う大願を、五劫にわたって思惟をこらし修行した」と説かれている。「無量寿経」の五劫思惟阿弥陀像は、奈良五劫院や京都大蓮寺のような螺髪を大きく湛えている。長い間思惟されたので髪が伸びたとされているのである。肉付きは良く、幼子のような体軀である。石仏では京都金戒光明寺（浄土宗）や知恩寺（浄土宗）墓地に見られる。

肥後の「五劫思惟の阿弥陀如来」肥満・憔悴論

井上見淳本願寺教学伝道研究センター研究員から『龍谷教学』第44号

「『五劫思惟の阿弥陀如来』肥満・憔悴論—玄雄師の論を手がかりにして」の高論に驚いた。

肥後で五劫思惟の法蔵菩薩が肥満であるか、憔悴であるかの論争が江戸時代末期に起こっていたことに論究されている。要約すると、肥後において「二明星」といわれた二人の学匠がいた。「功存一環中一到轍」の系譜につながる学匠、能令速満師（1812—1886）と鬼木沃州（1817—1884）であり、2師は同門であり後年ともに勧学になっている。

この2人による五劫思惟の法蔵菩薩の身形が肥満か憔悴かとの論争である

学国越中

近世に浄土真宗本願寺派で活発な活動が展開され、越中を「学国」と称えている。第五代能化の義教をはじめ学匠が輩出し、本山の教学に大きな影響を及ぼした。当時越中には尺伸堂学派（氷見）と、空華学派（浦山）があった。尺伸堂は空華廬よりも早く創設され、「学国越中」の発祥地と考えられている。

本願寺派で、三業惑乱という異安心事件が起きた。三業帰命説の正否をめぐる大騒動に発展し、宗派内で解決できず幕府の裁決を仰ぐことになる。氷見の尺伸堂学派は三業帰命説を奉じた。

肥後轍

熊本は古来宗学の盛んな所で真宗学史上肥後轍として一異彩を放ったものである。肥後轍は環中師の開く所で、彼は慧雲や功存に学んで一家を成し、肥後に帰ってからは、懇ろに後進を誘掖したのであるがその轍を受けた門侶が毎年相集って講義対論をさかんに催した。これを龍北会と言い後世まで続いたものである。肥後轍の特色は、「肥後の会読」と言われた程で、華やかに弁舌を戦わして相手を論破するのが主目的

芸轍

江戸時代中期から後期にかけて「芸轍」と呼ばれる、慧雲、大瀛、僧叡など著名な学僧を輩出。彼らは多数の弟子を育成し、その弟子達は安芸・備後国内に飛んで布教を続け、山間部でも講等の組織を作り、地域に密着した仏教として、信仰の中心となった。

やせ仏、五劫思惟の法蔵菩薩と節談説教

「上手な説教師は自由自在に善男善女の感情、心理をあやつることができた。質問されることはなかった。『聖人つねの仰せには、弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなり』というところでは、唯一の泣かせどころのように、浪曲かおまけの節まわしでうなった。さんざん翻弄され、いい気持ちにさせられた参詣者は、ひとりのこらず仏にたすけられたような気持ちになってしまうのである」

やせ仏の盛衰

三業惑乱以後の状況 身口意

真宗の二面性

学匠の篤信者 学匠の多く出たところに五劫思惟の法蔵菩薩

節談説教での伝承

歎異抄後序の教えの浸透

近世と近代の断絶

学塾の不振と近代教学の発展

教えは教団側だけではない、門徒側の視点

民俗学からの真宗